

2017年6月22日／浪宏友ビジネス縁起観塾

自分はどういう人間か

1. 概要

(1) 資料

増谷文雄著『阿含經典1』ちくま学芸文庫(p.380)／人間の分析(五蘊)に関する經典群／開題

(2) 内容

人間の成り立ちと、自分を知ることについて学んでみたいと思います。

2. 五蘊

増谷文雄博士は『阿含經典1』の、「人間の分析(五蘊)に関する經典群」の開題で、五蘊について解説しています。

「『五蘊』とは、釈尊が人間を分析して取り出した五つの要素をいう言葉である」(増谷文雄編訳『阿含經典1』ちくま学芸文庫、p.380)

五つの要素とは、色(しき)、受(じゆ)、想(そう)、行(ぎよう)、識(しき)です。

増谷博士は、五蘊の各支を次のように解説しています。

「その“蘊”とは、“要素”もしくは“構成要素”というほどの意のことばであって、釈尊がその人間分析にあたって挙げたのは、つぎの五つの要素であった。

- 1 色 物質的要素。人間を構成する物質的要素は、すなわち肉体である。
- 2 受 これより以下は、人間のいわゆる精神的要素であって、まずその第一には感覚である。感覚は受動的なものであるから、漢訳では、受をもって訳したものと思われる。
- 3 想 人間の精神的要素の第二は表象である。与えられたる感覚によって表象を構成する過程がそれである。
- 4 行 わたし(増谷文雄博士)はこれを意志もしくは意思と訳する。人間の精神はここから対象に対して能動に転ずる。
- 5 識 対象の認識を基礎とし、判断を通して得られる主観の心所である」(同書、p.380~381)

3. 「色」について

「色」は「物質的要素」です。人間を構成する物質的要素は「肉体」です。人間の肉体は実に複雑です。

人間の肉体については、古くからさまざまな研究が進められてきました。これによって多くのことが分かりましたが、まだまだ分からないことが沢山あるようです。

4. 「受・想・行・識」について

「受・想・行・識」は、「精神的要素」です。

「受」は「感覚」、「想」は「表象」、「行」は「意志」または「意思」、「識」は「意識」とされます。人間の心の動きを大まかに捉えたものと言っていいでしょう。

5. 「受」について

「六処」の理論では、「六根（眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・意根）」と「六境（色境・声境・香境・味境・触境・法境）」によって「六識（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識）」が生じるとありました。これが「受」に当たると見ることができます。

一口に「受」といっても、その内容は多様であり、複雑であると言わざるを得ません。

6. 「想」について

増谷博士は「与えられたる感覚によって表象を構成する過程」が「想」であると説明しています。認識したものごとを材料にして、あれこれと考えたり、思ったり、イメージを思い浮かべたりすることでありましょう。

こうした「表象」を作り上げていく心の働きが「想」なのでありましょう。

7. 「行」について

増谷博士は「人間の精神はここ（行）から対象に対して能動に転ずる」と述べています。

「受」で対象を受け取り、「想」で対象を思い描き、「行」で対象に働きかけるのです。

働きかけは言葉と身体的行為によって行なわれることになりましょう。

「受」が多様であり、「想」も多様に展開しますから、「行」もまた多様で複雑な様相を呈することになると思います。

8. 「識」について

「識」は、「対象の認識を基礎とし、判断を通して得られる主観の心所」とあります。

「主観の心所」とは「自分を中心にした心の働き」ということだと思えます。

「対象の認識」は、言い換えれば「自分の経験」です。自分の経験を通して、この身体とこの心が自分だという意識が生じます。これが「識」です。

認識・経験したことを蓄積するのも、識の働きと見られています。そうした認識・経験の蓄積が、色・受・想・行・識の働きに影響を及ぼします。

「色・受・想・行」が多様で複雑ですから、「識」も多様で複雑にならざるを得ません。

9. 五蘊と八支の聖道

(1) 「受」と「正しい見方」

「受」は「感覚」とされ、感覚知覚によってものごとを認識する機能です。

「ありのままをありのままに認識する」ことが、八支の聖道における「正しい見方」として考えられます。

(2) 「想」と「正しい思い」

「想」は「表象」とされ、「与えられたる感覚によって表象を構成する過程」とされます。認識したものごとを材料にして、あれこれと考えたり、思ったりするわけです。

正しい認識に基づいて、正しく考え、正しく思うことが、八支の聖道における「正しい思い」として考えられます。

(3) 「行」と「正しい言葉・正しい行為」

「行」は「意志または意思」とされ、「人間の精神はここから対象に対して能動に転ずる」とあります。対象に対する働きかけは、言葉と身体的行為によってなされます。

正しい認識、正しい思考によって、正しく判断し、正しく決断して、言葉と身体的行為によって正しく働きかけるのが、八支の聖道における「正しい言葉」と「正しい行為」として考えられます。

(4) 正しい生き方他

八支の聖道における「正しい生き方・正しい努力・正しいことに念(おも)いをこらす・正しいことに心を専注する」は、色・受・想・行・識のすべてによってなされると考えるのが自然だと思われれます。

いずれにしても、色・受・想・行・識のすべてが、真理に合った働きをすることが求められるのです。

10. 自分はどういう人間か

(1) 経文

八支の聖道における「正しいことに念いをこらす(正念)」について、阿含経は次のように説明しています。

「比丘たちよ、いかなるをか正念というのであろうか。比丘たちよ、ここに一人の比丘があって、我が身において身というものをこまかく観察する。

熱心に、よく気をつけ、心をこめて観察し、それによってこの世間の貪りと憂いとを調伏(じょうぶく)して住する。

また、わが感覚において感覚というものをこまかく観察する。

熱心に、よく気をつけ、心をこめて観察し、それによってこの世間の貪りと憂いとを調伏して住する。

あるいは、わが心において心というものをこまかく観察する。

熱心に、よく気をつけ、心をこめて観察し、それによってこの世間の貪りと憂いとを調伏して住する。

あるいはまた、この存在において、存在というものをこまかく観察する。

熱心に、よく気をつけ、心をこめて観察し、それによってこの世間の貪りと憂いとを調伏して住する。

比丘たちよ、この時これを名づけて正念というのである」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.174、実践の方法（道）に関する経典群／道相応／6分別の一節）

(2) 自分を観察する

まず、自分の身体、感覚、心を観察します。

「身体」は「色」、「感覚」は「受」と考えれば、「心」は「想・行・識」となりましょう。自分の「色・受・想・行・識」のありさまを、自分で観察するのです。

(3) 存在を観察する

自分自身を観察したら、こんどは「存在」を観察します。

「存在」とは、「世間における自分は、どういう存在であるか」ということでありましょう。自分は世間でお役に立っているのか。自分と他の人々との人間関係はどのようになっているのかというようなことを観察するわけです。

(3) 徹底的に観察する

ここに「熱心に、よく気をつけ、心をこめて観察し」とあります。

自分のことだと、つつい甘くなりがちですが、それではいけません。

嫌なところから目を逸らさないように、かたよった見方をしないように、手抜きをしないように、徹底的に、自分を観察するのです。

(4) 貪り・憂いを調伏する

観察することによって、「この世間の貪りと憂いとを調伏して住する」とあります。「世間」とは、人びとと交わる場のことです。

「調伏」とは、「身のありかたを正しく調える」ことです。悪いことをおさえて、善いことを行ない、身を調えることと受け取ってよいと思います。

自分を徹底的に観察することによって、人びととの交わりの中で、あれこれと貪り、それによって憂いが生じることが分かります。この貪りと憂いを調伏するのです。

1.1. ビジネス縁起観による五蘊の解釈

ビジネス縁起観では、五蘊について実務的に考察し、次のように解釈しました。

(1) 五蘊の解釈

色：「色」は、肉体です。受・想・行・識は、この肉体において働きます。

受：「受」は、外部からのインプット、内面からのインプットを受けて、認識が生じることです。

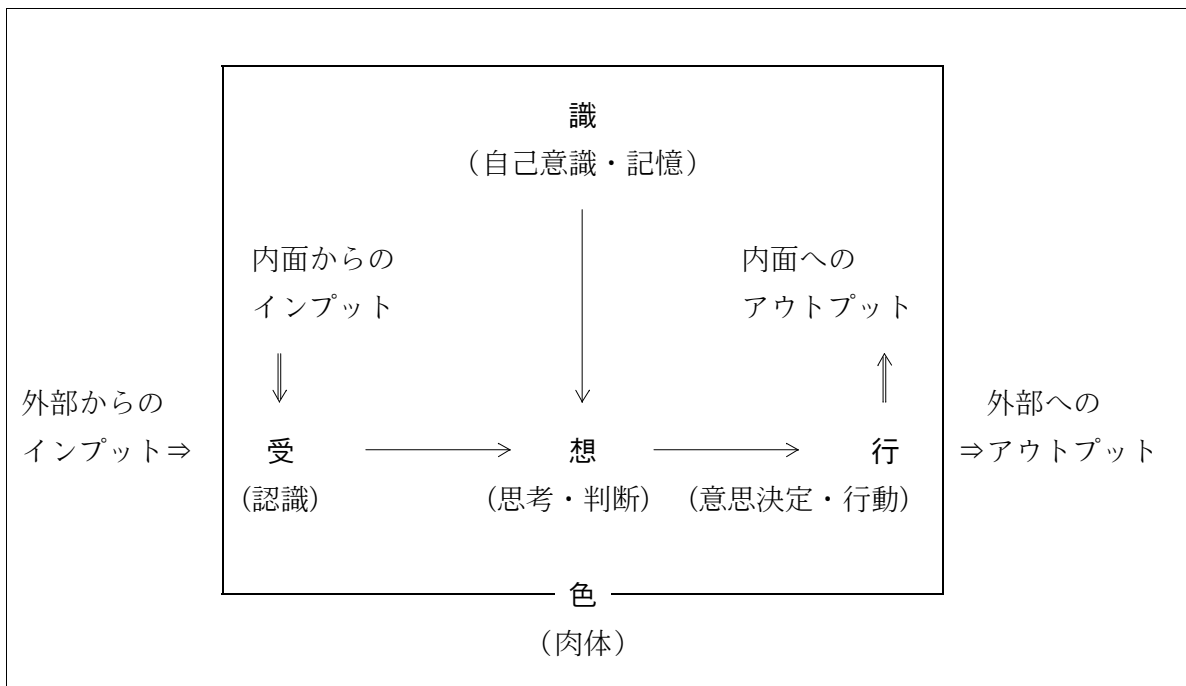
想：「想」は、「受による認識」と「識における自己意識及び記憶」によって、思考や判断が生じることです。

行：「行」は、思考・判断をもとに意思決定が生じることであり、ここから外部や内面に向かってアウトプットが生じます。

識：「識」は、「色・受・想・行・識」の働きから、自分はこのような人間であるという自己意識が生じることです。

また、これまでの認識・経験が「識」に蓄積（記憶）され、「色・受・想・行・識」の働きに影響を与えています。

(2) 概念図



(3) 活用

ビジネス縁起観では、この解釈を活用して、顧客対応のありかた、人材育成のありかた、人事・労務管理のありかた、組織運営のありかた、人間関係のありかたなどを研究しています。